

やまほん

# 余 レポート No.27

余 株式会社 神清

## 実態調査事例④20年前の粘土瓦屋根について

あまり知られていない屋根の実態に迫ります。

20年前の粘土瓦屋根について、具体的な写真をもとに報告します。



↑上写真は、築20年、粘土瓦屋根へ太陽光パネルを設置した現場です。場所は愛知県です。土葺き瓦屋根のため、屋根が重く、軽量化工事の一貫として太陽光パネルを設置しました。瓦・土を剥がした状況・劣化の有無をご報告します。



←左写真のように、粘土瓦を剥がすと土が出てきました。前日まで1週間、雨が降り、直前2日間でも13.5mmの降水量がありましたが、瓦の下は濡れていませんでした。瓦の緊結はなく、土の粘着により固定されていました。

→右写真は軒瓦です。軒瓦は尻部に2ヶ所、棧峠に1ヶ所、銅線で緊結されていました。瓦表面の番号は再利用するために、順番を付けました。



←左写真は土を剥がしたときの下地です。土の下には木羽葺き(トントン)と呼ばれる木を編んだシートになっていました。劣化・腐朽している場所はありませんでした。



やまほん

## 余レポート No.27

余株式会社 神清



←左写真は土を剥がしたときの下地です。土の下には木羽葺き(トントン)と呼ばれる木を編んだシートになっていました。また、間隔が空いて、土のズレ防止のために土留め棧が設置されていました。木羽葺き(トントン)・土留め棧とも劣化・腐朽している箇所はありませんでした。

→右写真は木羽葺き(トントン)を剥がした所です。その下には、アスファルトルーフィングが施工されていました。木羽葺き(トントン)の良さは透湿性があることですが、アスファルトルーフィングで小屋裏との間を塞いでしまうため、せっかくのメリットが失われ、もったいない組み合わせと思われると思います。



←左写真は土留め棧を留めていた鉄釘です。釘頭から30mm程度錆が発生していました。小屋裏に突き出た釘部は錆が発生していませんでした。



→右写真は小屋裏側の野地板です。雨漏りの染みや腐朽劣化しているところはありませんでした。野地板はバラ板でした。

瓦屋根・築20年では腐朽劣化している部分はありませんでした。(換気棟・軒天換気などは設置されていませんでした。)

